飛田残月

黒岩重吾

田残月

黒岩重吾

中央公論社

飛田残月

九八〇円

©一九八〇

昭和五十五年三月十日初版印刷
昭和五十五年三月二十日初版発行

著者　黒岩重吾

発行者　高梨　茂

印刷　三晃印刷
製本　小泉製本

発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二-八-七
電話　五八一-五九二一
振替　東京二-三四
検印廃止

目次

飛田残月　5
雑草の宿　37
事件の夜　59
雲の花　85
木の芽の翳り　113
夜の聖像　159
憎悪の影　201
霧の顔　223

装幀　松田穣

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

飛田残月

飛田残月

私は西成に住んでいた頃、旅館を転々としていた。先日某社の雑誌に随筆を書くために飛田界隈を訪れた。私が一時住んでいた松田町のアパートはまだ健在だが、松田町は天下茶屋東一丁目と変っていた。東田町も太子×丁目になっている。折角由緒のある名前が変るのは惜しい。旧東田町の若柳旅館を訪れてみると、玄関のドアに、病気療養中のため営業をしていない旨の貼り紙があった。若柳旅館のおかみには、色々と世話になったし、貼り紙を見て心が痛んだ。飛田界隈に住んでいた頃のことは大抵小説に書いているが、まだ書いていないエピソードも残っている。

若柳旅館を出ると飛田商店街である。地下鉄の動物園前から、旧飛田遊廓の大門通りまで続いている長い商店街だ。旧飛田遊廓の近くに黒板塀の古びた旅館があった。昭和三十三年に売防法が施行されてから、私は一時期その旅館に二週間ばかり泊ったことがあった。玄関の戸を開けると左側に下駄箱が置かれているのが印象的だった。玄関の間は狭く正面に階段があった。

私が何故その旅館に泊ったかというと、昭和三十一年頃、一人の娼婦と親しくなり、その旅館で休憩したことがあったからである。

娼婦の名前は忘れたが、顔に青い蛇の形をした痣があったので、彼女のことは良く覚えているのだ。ここでは芳子としておく。

私が芳子と会ったのは、飛田商店街から山王町に通じる狭い路地のような道に建っていた旅館であった。その旅館は今はなくなっているが、当時は娼婦が集まるので有名だった。私はその頃占い商売にも飽き、夕刊新聞のコントや、大阪の雑誌に雑文を書き、生活していた。あの当時で、月収二万ぐらいはあったような気がする。その旅館に集まる娼婦の枕代は、一時間で千五百円から三千円というところだった。旅館のおかみは色が黒くたくましかった。旅館の亭主はかつて芸人だったらしいが、その当時はおかみのひもになり、何時も帳場の横の小部屋で寝転んでいた。酒好きで一升瓶を放したことがない。

もう六十近かったが、酒やけした斑点のある顔の何処かに往年の面影を残していた。私は旅館の亭主から、コントのネタを良く貰ったものだ。本当か嘘か知らないが地方巡業の時は女に持て、一晩に三人もの女と遊んだことがある、と得々と喋った。そんな時の亭主は威勢が良く、濁った眼に活々とした光が宿るのだった。当時の亭主は過ぎし日の思い出だけに縋って生きていたのかもしれない。だが、そんな亭主の思い出話を聴く人間といえば、私ぐらいしか居ない。だから亭主は私が訪れると、何時も部屋に呼び、私と話をしたがった。旅館のおかみは余り良い顔をしなかった。私が行くと亭主の酒の量が増えるからである。亭主は何時もおかみの尻に敷かれていたが、私が居ると味方が来たように威勢が良くなり、おかみに、酒を買って来い、と大声で命令したりする。おかみが文句をいうと、

「わしに惚れて、追い掛け廻した昔を忘れやがったのか、お前より好い女が沢山居ったんや、鏡で面を見直せ、わしの女房になる面か！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

と怒鳴ったりする。

だがそんな時でも唇の端からは涎が流れ、舌がもつれて何となく不様だった。おかみは、

「阿呆、あんたこそ鏡を見たらええ、蝦蟆の油と同じや、よう卒倒せんことや、蝦蟆はな、まだ油を流すけど、もう油もないやないか」

負けずにいい返すのだ。

ただ、おかみはぶつぶついいながらも、一人居る女中に酒を買いにやらした。本気になって擲り合ったなら、おかみの方が強そうだった。

亭主は軽い卒中で、少しだが身体が不自由だったからである。だが別れないところを見ると、亭主はおかみにとっては、分身になっていたからであろう。怒鳴り合うことによって、この夫婦はお互いの存在を、夫婦であることを確認していたのかもしれない。

秋の或日、大阪で発行している雑誌社から原稿料が送られて来た。短編小説を書いたのだが、その雑誌社は潰れかけ寸前で、私は原稿料は諦めていた。原稿料は一万円近くあった。私は一升瓶を持って、その旅館を訪れたのである。帳場のおかみは、私がさげている一升瓶を見たにも拘らず機嫌が悪かった。私は一升瓶をおかみの前に突き出して、おやっさん居るか？　と訊いた。おかみは顎をしゃくると、

「来客中やで」

といった。

私の一升瓶を見た亭主は、多分相好を崩して喜ぶ筈だった。私はそんな亭主の顔を楽しみにや

って来たのである。私が肩をすくめて帰ろうとすると、おかみが私を呼び止めた。
「まあ、入ってみたらええがな」
とおかみは吐き出すようにいった。
襖が閉まっていて、亭主の声と女の声がした。珍しく亭主は楽しそうに笑っていた。私はおかみの不機嫌な顔を思い出し、入って良いものかどうか迷っていると、中から亭主が、
「こら、盗み聴きするなよ！」
と怒鳴った。どうやら、私をおかみと間違えたらしかった。
私が慌てて、俺や、というと亭主は、
「何や、立っとらんと入れ、遠慮せんでええ」
と酒がかなり入った声が聞えて来た。
卓袱台をはさみ、亭主と髪を上で丸めた女が向い合って坐っていた。亭主の顔はゆるみ、シャツの胸ボタンがはずれていた。女は赤い化繊のツーピースを着ているが、私の方に背を見せているので、顔は分らない。肩幅の広い女だった。髪の具合で水商売の女であることは想像がついた。私は亭主と女の間に腰を下ろしたが、彼女の顔を見て、あっ、と息を呑んだ。左頬に蛇に似た青い痣がついていたのである。入墨したような感じで、私は思わず視線を背けた。私はそんな自分に自己嫌悪を覚え、一升瓶を勢い良く卓袱台に置いた。亭主は、酒が切れ掛っていたところだといい、大喜びで一升瓶の王冠を取った。
その痣のある女が芳子だったのである。芳子は三十半ばで肉付きの良い身体だった。ただ鼻は

低く鼻翼と頬が張り、痣がなくても美人とは縁遠い容貌である。彼女の取り柄は肌がなめらかなことだった。

「黒さん、わしの昔の友達や、長い間兵庫県の山奥に引っ込んどったんやけど、また出て来よった、というより逃げ出して来よったんや。芳子、黒さんはなあ、わしの飲み友達や、わしの勘ではな、学のある人やで、だから、わしは黒さんを、この部屋に入れてるんや」

亭主はそんな風に紹介し、私を赤面させた。私は亭主に学があるなどといったことはなかった。株屋に居て失敗したので、家にも帰れず、この辺りの旅館を転々としている、と話していたのだ。ただ嬉しかったのは、亭主が私を信頼してくれていることだった。亭主の口からそんな言葉を聞いたのは初めてだった。

芳子は黙って頭を下げた。私は一杯だけ飲むと、また来るといってアパートに帰った。私が居ては、亭主と芳子の雰囲気が何となく気不味くなりそうな気がしたからである。

数日後、私は亭主から芳子の身上話を聴いた。芳子は兵庫県の山奥の地主の娘だった。顔の痣は生れながらのもので、なかなか縁談が纏まらない。亭主が芳子を知ったのは、昭和二十年代の半ばで、最後の巡業の時だった。

その時、芳子はもう三十になっていた。亭主が属していた旅芸人の一座は借金だらけで、解散直前だったのである。

亭主は芳子の家が山持ちなのを知り、芳子に手をつけたのである。勿論金のためだった。顔の痣のため薄暗い部屋の中では無気味な感じがしたが、明りを消してしまうと、芳子の身体は柔ら

かく艶があった。女遊びばかりを続けて来た亭主が、驚いたほど素晴しい身体だった。亭主は涎を流しながら卑猥な言葉で彼女の身体の良さを表現した。

「まあな、それで芳子の奴、金を持って家を飛び出しよった。岡山まで付いて来よったからなあ、わしはその間大尽暮しやった、ところが一座の方は、岡山で解散になった。わしは芳子に因果を含めて実家に戻した。そこまでは良かったんやが、一年たった頃、芳子はここに来よったんや、うっかり家の住所を教えたのが失敗やった。うちのおばはんが怒りよってな。芳子の前で、こんな化物を相手にしよって、と喚きよる。わしがおばはんに手を出したんはその時が初めてやなあ、おばはんが怒りよるのも無理はないけど、いい方がえげつない、芳子は泣く泣く家に帰りよった」

亭主は一息つくと、遠くを思い出すような眼になった。たんたんと喋る時、亭主の舌はもつれなかった。私は亭主の思い出話を聴きながら、旅芸人の生活を生々しく感じた。

芳子はいったん実家に戻ったが、時々薯や山菜を持って亭主に会いに来た。

だが酒びたりになっていた亭主には、芳子を抱くだけの能力はなかった。

芳子が家を飛び出し、神戸で娼婦になったのは一昨年だった。芳子のひもはやくざであった。客の中には変った男が居て、芳子は一種の変態的な客に持てたのである。

「そのひもが悪いやつでなあ、夜も眠らせんと、芳子を働かせよる、それで芳子は昨年ひもから逃げて実家に戻った。ところがひもが実家まで芳子を探しに来よったんや、それで芳子のやつ、また実家を飛び出して、わしのところに相談に来た、というわけや」

亭主は肩をすくめるとコップの冷や酒をあおった。つまり芳子は、ここで働きたい、といったらしい。だがおかみは亭主と芳子の関係を知っている。だから承諾しない。芳子は今、西成の旅館に住みながら、他の旅館と契約し客を取っている、ということだった。

「わしは芳子にいうとるんや、人生は勝負や、とな、お前は今は稼げるんやから、思い切り稼げとな。幸い芳子には子供も居らんし、ひももついていない、稼いだ金は自分のものになる、二、三年死んだ気で働いたら、百万ぐらいは溜る、それを元手に商売をやったらええやないか、小さい一杯飲屋なら充分やって行ける、その時はわしも応援してやる積りや」

そういいながら亭主は痩せた肩をそびやかすのだった。

晩秋がやって来た。飛田界隈は冷え込みがきつい。私はそろそろ飛田を出て、実家に戻ることを考えていた。このまま、この辺りの人情にひたり、だらしない生活を続けていたなら、自分が駄目になりそうな気がしたからである。コントや雑誌の原稿料稼ぎにも限界があった。私は新聞広告を見て、宗右衛門町のキャバレーの宣伝部員になったのである。それでも暫く私は飛田界隈に住んでいた。

時々亭主に会い、彼の部屋で飲んだりした。私は芳子のことを忘れていなかったが、亭主が口にしないので、質問するのが悪いような気がして黙っていた。亭主が芳子のことを話さないのは、芳子の生活が旨く行っていないからだろう、と漠然と想像していた。

その年は十一月の末あたりから寒さが厳しくなり、吐く息が白く感じられた。キャバレー勤めは面白くない。宗右衛門町の灯が華やかであればあるほど、私は自分自身が惨めに思えるのだっ

た。給料は安く、宗右衛門町界隈では飲めない。自然足は飛田界隈に向く。当時私は、終戦後の闇屋時代に手に入れたギャバジンのジャンパーを着ていた。かなり古びているがなかなか丈夫で、ほころび一つなかった。

十二月の初めジャンパー姿で亭主を訪ねてみると、何時もと違って、おかみが愛想良く迎えた。おかみは私に、おっさんの身体が悪くなったから見舞ってやって欲しい、といった。何だか心配になり、部屋に入ってみると、亭主は蒲団に横たわっていた。亭主の顔は一廻り小さくなり、皺が増えたようだった。

「黒さん、もうあかんわ、酒がまずくなった、お迎えが近いようや」

「そんな阿呆なことがあるかいな、おっさんみたいに悪いことばかりして来た男は、案外長生きするもんや」

私としては、そういうより仕方がなかった。何となく、亭主の寿命もこれまでだ、という気がした。それにしても、おかみが、愛想良く迎えたのは、どういうわけだろう、と私は不思議だった。亭主が病気になったのだから、もっと心配そうにしていても良い筈だった。私は亭主に、おかみさんは元気やなあ、おっさんも心丈夫やないか、といった。すると亭主は首を横に振った。

私は亭主の話を聴いて吃驚(びっくり)した。

亭主の身体が悪くなり、今までのように自由に歩けなくなると、おかみは何時の間にか芳子を探し出し、客を取らせるため、この旅館に出入りさせるようにしたのだった。

そのためおかみは、芳子が契約していた旅館にスカウト料を払ったのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo